厚子田村

松山善三

下巻

蔵書印

村

下巻

松本清張

潮出版社

厚田村　下巻

一九七八年八月二十五日　発行
一九八二年六月二十五日　十三刷

著者　松山善三
発行者　富岡勇吉
発行所　株式会社　潮出版社

郵便番号　一〇二
東京都千代田区飯田橋三―一―三
電話編集部(〇三)二三〇―〇七八一
販売部(〇三)二三〇―〇七四一
振替　東京　五―六一〇九〇

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・明和印刷株式会社　製本・東京美術紙工
© Zenzo Matsuyama 1978 Printed in Japan

厚田村・下——目次

第十章　羆騒動　7
第十一章　夕焼雲　25
第十二章　測量技手　49
第十三章　山百合　65
第十四章　復讐　85
第十五章　帰郷　103
第十六章　呱々の声　115
第十七章　母と子　131

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第十八章　利尻富士　155
第十九章　猛稽古　175
第二十章　再会　193
第二十一章　吹雪　213
第二十二章　戦火の巷（ちまた）　231
第二十三章　祭り囃子（ばやし）　273
あとがき　303
参考文献　305

題字・梅原龍三郎
装幀・高峰秀子
写真・伊丸岡秀蔵

厚田村——下卷

第十章　羆騒動

「芸妓」は日本固有の「職業」で、その元祖は徳川幕府の中期、江戸「吉原」にさかのぼると伝えられるが、娼妓、酌婦とは異なる。

娼妓、酌婦は「売笑婦」と嘲われたが、芸妓の意地は、むしろ芸道へ走って、そのさげすみを蹴とばした。

「花街」「花柳界」という言葉が生れるのは、三味線、太鼓が客座敷に入りこむころからで、それ以前は、「遊女屋」「茶屋」と呼ばれた。寛政の頃、一人の座頭が箱館の茶屋で三味線を引いて、日々の糧を得たというのが蝦夷地に三絃の流れたはじめだと聞く。

蝦夷奉行が、箱館奉行所となった享和三年、茶屋営業が公認され、芸妓が現れた。高田屋嘉平が奉行を慰めるために内地から芸妓を呼んだのが、そのはじまりである。

小樽に遊廓が免許されるのは明治六年。場所は金曇町、新地町であるが、海運業の発展が函館を抜くと同時に、花街も、道内随一の華やかさになっていた。

一介の芸妓、世津が、小樽海運荷役の親分、鳥羽十三郎を向うにまわして、羆の剣製を競り合い、丁々発止の末に、五百円という大金を投じ、十三郎をうち負かして「羆」をわがものにしたという噂は、その夜のうちに、小樽花街はもちろん、町の人びとの酒の肴、暇つぶしの話題となって突っ走り、路地の奥の、そのまた奥にひっそりと住む爺さん婆さん、寝たきりの病人や、わんぱく小僧の口にものぼるほど、沸きに沸いた。

白米一升六十銭、うどんかけ一杯二銭の時代に、五百円の「羆」である。各省、国務大臣の年俸が六千円といわれたから、五百円という金額は、一国の大臣の月給に相当する。家が一軒買える値段である。一目、その熊を見たいという町民や子供たちが、翌日の朝から、ひきもきらず、世津の置屋「丸辰」の前に列をなした。しかし、世津は倉座敷の扉を閉めきったまま、頑として、ゴンの姿を見せようとはしなかった。

騒ぎは大きくなった。「丸辰」を取り囲む町民の数は一千を越え、駐在の巡査と新聞記者が走りこんできた。

「丸辰」の女将は蒼くなったが、世津は動じなかった。

「見せてやりなさい。見せたからといって減るものでもあるまい……」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

巡査は、己れの興味も眼尻に見せて、世津を口説いたが、世津は相手にしない。
新聞記者の一人が、膝を叩いて言った。
「入場料を取って見せたらどう？……一人から五銭取っても一千人なら五十円になる……」
世津は、その男に向って軽侮の色を投げた。
「あなたの子供が、もし死んだとして、剝製にして、見世物小屋に出しますか？」
「子供？……冗談じゃない。……そんなことをしたら、手が後にまわる」
「熊や鳥を、剝製にして良いと誰が決めたのですか？」
「何言ってるんだ。……あんたは自分で、それを買い、一人で楽しんでるじゃないか……」
「楽しむために買ったんじゃありません。……私は、あの羆を、生れ故郷に帰してやりたいのです」
「帰す？……五百円で買ったものを？」
巡査が横から口をはさみ、額の汗をぬぐった。
「帰すって、どこへ？……」
「お巡りさん、失礼ですけど、あなたは自分が死んだら、どうしてほしいと思いますか……」
「わたしは、故郷（くに）の墓へ入る。……わしの子供たちが、そうしてくれるだろう」
「羆の故郷は、厚田の森です。発足（はったり）の山奥です。私は、あの熊をそこへ連れもどしてやりたいの

です。ひっそりと咲くチシマザクラ、たわわに実る山葡萄、楡の木陰や厚田川の沢で、あの熊を遊ばせてやりたいのです……」

「死んで、剝製にされた熊が、どうして遊ぶんだ……」

新聞記者は、この女、頭が少々おかしいのではないか、といった顔で巡査をふりかえった。

世津はもう、答える興味も、説明する意欲も失っていた。

「おひきとり願います。私が、私のお金で買った熊の剝製です。どなたさまにもお見せすることはできません……」

しかし、世間は承知しなかった。待ちくたびれた野次馬は、時がたつにつれて、次第に猛り、「丸辰」の玄関になだれ込んだ。

「熊はどこに置いてあるんだ」

「見せろ」

「出せ、五百円の熊を……」

「この家をぶっ潰すぞ」

じれた男たちは、熊の咆哮を真似てうなり声を発し、押し寄せた群衆の力は、勢いあまって、「丸辰」の玄関をぶち破り、土足の男たちが転がり込む始末となった。

警察と消防署が動いて、騒ぎは、ひとまず収まり、夕暮れとともに人びとは散っていったが、

世津が熊の剝製を公開しないかぎり、明日もこの騒ぎはつづきそうな気配であった。
「丸辰」の女将と、駒八が警察署長に呼び出された。
「なんとかしろ……」と命ぜられたが、二人に、これという思案が浮ぶはずはない。浮いてくるのは、冷汗ばかりである。
「どうしたら、よろしいでしょうか」と、二人は口を結んで、逆におうかがいをたてた。
世津に罪があるわけではないから、法規や罰則で取り締ることはできない。罪は、むしろ、町民の野次馬根性、好奇心をあおりたてた、人から人への「噂話」にあるというべきだろう。
「しかし、それほど、町民が見たいと騒ぐものなら、倉座敷に置いておくより、どこか小学校の講堂にでも陳列して、みんなに見せてやったらどうだ。そうすれば、小学生、中学生の教育にもなるではないか……」
署長は、バサバサと扇子の風を送りながら、どうだ、名案ではないかと自分でもうなずき、駒八を見た。
「そうはいかんのです。……世津は、私にさえ、その熊を見せてくれません。人に見せたくないから、私が買ったんだと申しております」
「人に見せたくない？……」
「はい」

「理由を言え……」
「わかりません……」
「人をあれほど、騒がしておきながら、理由もないと言うのか。……お前の家が、ぶっ潰されても、警察は知らんぞ」
「丸辰」の女将は震えあがった。陽が暮れ落ちても、まだ家の前には、莫蓙を敷いて酒を汲み、「熊を見せるまでは帰らねえぞ……」とわめく男たちの姿が残っていたし、妙見川の畔にも、夕涼みの縁台に腰をおろして、世津や、熊の剝製を一目見たいと待ちつづける男たちが、百人は越えると耳うちされていた。むしむしと、暑くるしい夏の夜である。酒が、悪くまわれば、狂気に走る男がないとはいえない。
馬鹿な買物をしたものだ。熊一頭に五百円。いくら人気のある芸妓だといっても、月の稼ぎは知れている。いまだに借金のある身体ではないか。
芸妓の収入は線香代という名で呼ばれ、一本四十銭から五十銭が相場である。半玉は二十五銭。その中から、見番への手数料や料理店への口銭、さらに税金がひかれ、芸事を習えば師匠への礼金や衣裳代、食いぶちも馬鹿にはならない。どんなに気ばって働いても、一日二十四時間を三十時間、四十時間に引きのばすことはできない。五百円の大金を、一本五十銭の線香代で割ったら、一千本ではないか。売れれば売れるほど、出銭の多いのが、この世界である。借金は多少減って

も、貯蓄のできる身分ではない。五百円の返済は、一年はおろか、まごまごすれば、二年、三年、まかり間違えば、生涯、利息とその支払いに追われて、やがて、わが身を滅ぼす兇器にもなりかねない。生きてる熊なら動物園へ売ることもできるが「金毛の羆」といっても、たかが剝製ではないか。何を血迷って、そんなものに五百円の値をつけたのか。阿呆につける薬はない。おまけに、この騒ぎである。「丸辰」の女将の腹は煮えくりかえっていた。

「わかりました。署長さんのおっしゃる通りにいたします。世津は、あの熊を自分の金で買ったなどと強情はっておりますが、借金こそあれ、現金は十円も持っちゃおりません。この私が、みんな立替えたんですから……もう、ご迷惑はかけません。四の五の言ったら、熊は私が引きとって、見世物小屋にでも叩き売ってやります」

女将は、自分の言葉に興奮して、駒八をうながすと、警察署の玄関を出た。

駒八が、風に流れる女将の袖をひいた。

「待ってください女将さん。……あの妓が、客の鳥羽十三郎と競りあって、五百円という大金で熊の剝製を買ったのには、何か深いわけでもあるんじゃないの？……」

「わけがあるなら、私だって、世津の味方になるけど、何を聞いても返事はなくて、ただ、可愛いから……毛並がいいの……爪がどうのって、気でも触れたんじゃないかと思ってたところへ、この騒ぎでしょ。……一ぺん、家へきてみてちょうだい、玄関の戸はへし折られ、転がりこんだ

土足の男が、座敷から裏口へ抜けながら、私の煙草盆を掻っぱらっていったのよ……」

女将は、その時の恐怖と恨みを駒八にぶつけ、奥歯をぎりぎりと噛んだ。

「よく売れるから、近頃、のぼせて、天狗になっているのよ、世津という妓は……」

「顔はやさしいけど、根は強情だから、一度曲ったら、もとへもどすのが難しくなるわよ……」

「いいえ。金で締めあげてやる……」

「金といえば、さっき女将さんは、五百円の代金を立替えてやった、と言ってたけど……」

「そんな大金が、家に遊んでるわけないでしょ、丸の旦那に頼んで……」

「かねまるって……高島の？」

駒八は、思わず、大きな声をあげた。丸は、世津が芸妓になって名披露目をした最初の夜の客ではないか。しかも、その席上、世津は、貰った盃を相手の面上に投げかえすという大事件をひきおこしている。騒ぎは料亭中島屋の主人が、置屋「丸辰」の女将を同道して謝罪するという条件で、一件落着したかにみえたが、男、丸の恨みは、それで消えたわけではなかった。いつか、俺の腹の下へ、あの女を組み敷いてみせると、人にも豪語し、「丸辰」の女将に「世津の水揚げはわしにさせろ。わしが世津の旦那になる」と、再三の申入れであった。その丸から金を借りては、世津を売るようなものではないか。

駒八の顔に、焦りと憤りの色が走った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com